ごとに急増したため、1人当たりの生産処理量は著しく増加し、残業時間も多くになっていることが判明した。
作業人員を倍増し、残業を停止し、その他の条件を整備したところ、作業者の健康状態は著しく好転。現在は増設機械設備を整えることで根本的な対策をたてている。

266. ドリン剤の毒性について
（1. 急性中毒実験）
三浦武夫、原一男、橋本和夫、金井聡子、
中島泰知、宿木健子（大阪府立公衛研）

ドリン剤（エドリン、デイルドリン、アルドリン）中毒に関する研究

武田俊輝、新谷善治（岡山大学内科学）

ドリン剤は広範囲かつ多量に使用されている殺虫剤であるが、人畜に対し強い毒性を有し、ことにエドリンはパラチオンに匹敵する毒性を有するといわれている。

私どもはドリン剤の毒性について検索した結果、家児の急性毒性LD50はエドリンでは薬口投与時2.3mg/kg
皮下注射時 13.1mg/kg であり、アルドリンは薬口投与時 25.1mg/kg、皮下注射時 55.3mg/kg であり、デイルドリンは薬口投与時 22.3mg/kg、皮下注射時 54.2
mg/kg であった。

私どもは、さらに家児についてこれら3種のドリン剤中の毒性を検討し、まず、皮膚、白血球、血色素、赤血球数、血液検査値等の変化をもとに毒性を検査した結果、急性中毒時に白血球数の急激な増加をきたす例があり、かかる場合には、急性の出疹の発赤、肝、腎臓、肺の急性の変化が観察された。その他の、食道、肺の実験による、肺の機能の変化が観察された。

発生蒸気の性質：実験Aでは、TEAの酸化反応の不完全なが進んだ生成物が存在すると考えられる。実験Bにおいて発生する蒸気をガスクロマトグラフにより分析すると、エチアルデヒド、ブタノール、エチレンと、不明成分であり、この成分は、蒸気発生後の時間経過とともに変化する。即ち、不明成分は減少し、エチアルデヒド、ブタノールが増加する。この不明成分の、保持時間が蒸気水素である。

5. 増加動物の症状並びに病理組織学的所見から、TEA及びその酸化生成物は、肺の刺激物としての毒性を有することが明らかになった。なお、その症状等から判断すると、TEAの酸化生成物の中、前記不明物質を多く含む蒸気ほど、毒性が強いようである。

268. 新農薬 Blasticidinの毒性

高木茂、飯塚喜一、青木弘、上田喜一
（東京大学 医学部 医学科）

米原らによって、Streptomyces griseochromogenesの培養液より抽出されたBlasticidin-S（BcS）は、イネの「いもち」病に対し、顕著な治療効果を示し、従来、慣用されてきた有機水銀剤に代用しうる可能性があ